

トラクターの利用と土地利用について

滝本 隆夫

(九州農試経営部)

TAKIMOTO, T.

Study on the Tractor use and Land Utilization

① トラクター利用の意義を土地利用の高度化、経営の集約化という視点より整理してみた。ここにとり上げた一集落は、総耕地面積97ha、農家戸数82戸、比較的兼業機会の少ない佐賀平野の純農村地帯に位置する。稲作集団栽培の実施を契機にトラクターを共同利用しているが、主作目は水稲（直播、移植）、玉ネギ、麦類である。② 考察結果の概要 (a) トラクターの利用は 作業種類が多く利用期間の中が広いが（8種類で利用皆無は8～10月の3ヶ月）時期的には5～6月に集中し（60%）冬期の利用が少ない。(b) 階層別利用状況をみると 上層ほど多いがそれが顕著に現われるのは水稲直播 (c) トラクター利用面積が大きくなるほど主作目の作付面積も多くなるが、その傾向は3ha以上利用の農家群で著しい。(d) 直播面積は経営面積の広狭と強い相関があるが、玉ネギは下層でも広くとり入れられている。トラクターの利用と主要作目作付状況に関する考察から、またトラクター利用を契機として直播、玉ネギ、麦類の面積が拡大されている事実から、集約化への展開を伺うことができる。しかしながら現状においても、又今後より積極的に利用率を高め、経営の構造を改革していくという立場よりみた場合、考慮しなければならない問題も少なくない。そのいくつかを上げて要約に代える。

③ 土地利用の高度化を計るための第一の課題は、冬期の利用率を高めることと、5～6月にかけての農繁期の利用を計画的に進めることである。その場合まず問題になるのは (a)、圃場の乾田化。当地が玉ネギの適地だという意味は、湿潤な圃場が玉ネギの生育、収量に良好だということであるが、重粘な圃場ではトラクターによる砕土化が不十分であり、耕起時期の乾田化、移植後の流水という条件整備が必要である。麦類はビール麦が90%、これは玉ネギの収穫前に取入れができ、学働配分上好都合であり

面積拡大の方向にあるが、そのためにはトラクターによる計画的播種が前提となる。水稲直播は、その適期が5月下旬～6月上旬と短期間であるためより大きな阻害要因として作用する。乾田状態でトラクターの機能が発揮されるが湿潤で砕土不十分な圃場での播種は発芽、生育の不揃を結果し、また排水不良の圃場では降雨量によって播種日が左右される。直播への作業が集中する日とそうでない日があること、6月10日以後2回目打返し作業（直播失敗田）が多いのはこの間の事情を物語っている。(b) オペレーターの養成。員数増加で負担軽減を計ると共に、作業種類が多く重粘な土壌での耕起には熟練した技術が要請されている。また作業班編成の仕方が属人的であることは、ユイ、手間替など農作業面では好都合であるが、圃場の分散はトラクター利用上、土地利用上不都合な面も多い。(c)、直播の前作は休閑田が60%を占めている。直播による省力化が果されても裏作が否定されているところに問題があるが、裏作跡地の直播は（特に玉ネギ）施肥設計がむづかしいという技術的問題がある。(d) トラクター利用により直播の導入、裏作拡大という経営展開の荷い手層は、比較的経営面積の大きな中、上層農の中にみられるが、このような個別経営の分化は作付時期の乱れを結果し、経営発展の阻害要因ともなる。（たとえば直播の場合、隣接圃場よりの漏水）。当集落では30年頃、一応土地改良を行っているが、それは耕耘機の利用に耐えるものであってもトラクター利用に関してはいくつかの問題がある。したがって、集約化への展開が認められても、それはあくまで個別経営の条件内での展開であり、そこには自ら限界のあることも自明である。基本的には灌排水にかかわる問題であるが、トラクターの利用、土地利用に関する問題は集落全体、あるいはより広い範囲で考慮すべき段階にあるといえる。